

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	診療参加型臨床実習の是非
別タイトル	Pros and Cons of clinical clerkship
作成者（著者）	藤井, 毅郎
公開者	東邦大学医学会
発行日	2022.12.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 69(4). p.204 204.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	論評
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2022_029
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD56636088

診療参加型臨床実習の是非

平成29年に一般社団法人日本医学教育評価機構(JACME)による医学教育の分野別評価が始まり、臨床実習がさらに充実することが期待されるなか、診療参加型臨床実習をさらに進めていくことは喫緊の課題となっている。このような背景を踏まえ、臨床実習における基本的手技などの修得水準を現在よりも引き上げ、卒業時には、より円滑に臨床研修に移行できる仕組みを整備していくことが望まれる。しかしながら、現状では診療参加型実習は推進しておらず、また、優れたモデルの報告もなく、どの教育施設においても混乱しているのは予想できる。

医道審議会医師分科会報告書では、いわゆる Student Doctor による医行為の実施が法的に位置づけられれば、必要に応じた同意を得られることで、診療参加型臨床実習は促進されることが期待されるとし、令和5年4月1日に法制化される。本当にそうであろうか。我々の研修医時代には法的資格を獲得し医行為を行うことは、医師自身の前向きな姿勢と指導医の積極的な指導がなければ成立しなかったが、いまだに、見て学び、技術を盗めとする日本の職人手法の教えがはびこり、教育水準を低くしている可能性がある。現状では、多くの学生に自立性や能動的な姿勢も少なく、同時に十分な時間をかけた親身な指導は、臨床現場にかかわる医師にとって人的資源と時間的余裕がないと行えない。医道審議会医師分科会報告書では、従来医師免許取得後の臨床研修において初めて行っていた診療の一部を実施することや臨床実習中により多くの診療能力の修得が可能になることにより、臨床研修による負担が一部軽減され、医師の働き方改革にも資することが期待されると述べてい

るが、大学病院に勤務する医師には必ずしも当てはまらない。学生も目前にある OSCE を含めた卒業試験、マッチングの準備と実行に注目してしまい、受動的な実習になっているのが現状である。非能動的な教育は、非能動的な学生を生み出すことにもなりかねないので、早急に教育専門性が高い教員の人的確保・増員が必要である。

医学教育の本質を学ぶ機会がなかった指導医たちが、医学教育に力を注ぐことに若干の抵抗があるのも理解できるが、積極的に行われている FD や医学教育講演会の受講率からすると、教員の多くが興味を持って臨床実習教育に力を注いでいるとは思えない。また、医師の教育における貢献は、医学部全体として評価されるが、個人的な評価としては曖昧なもの問題である。

我々が医師を目指したのは、臨床医や研究者になるため、教師になるためではなかったが、その過程には上級医からの親身な指導があったことは忘れてはいけない。時代は変わり、臨床研修医や専攻医も屋根瓦式に医学生への指導を積極的に行われることが望まれ、また評価もされるべきである。さらには、医療関係者への周知活動、教育カリキュラムを含めた環境整備と構築、社会の理解、何よりも教員と学生、双方の意識改革が必要である。質の高い医療を継続提供するためには必ず次世代の育成が必要であり、その根源になる精神は教育である。教育なくしての医学部は、存在価値が危ぶまれることを再認識すべきである。

(東邦大学医学部外科学講座心臓血管外科学分野：
藤井毅郎)

DOI : 10.14994/tohoigaku.2022-029